

思い出すことども：私の修業時代

相馬 保夫

SOMA YASUO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.20 (2018), pp.199-204.

昨年6月、上野の東京都美術館で開かれていた
ブリュッゲル「バベルの塔」展を見に行った。その
帰り道、ふと思いついて寛永寺から谷中墓地を
回った時のことである。谷中には何度か行ったこ
とがあるが、墓地の方は初めてであった。何気な
く訪れたのだが、東京教育大学時代の恩師である
穂積重行先生の父上、著名な法学者穂積重遠のお
墓があるという。行ってみて驚いたことに、その
近くには、日本資本主義の創始者とも言われる渋
沢栄一の巨大なお墓があり、その側面に重遠の父
である明治の大法学者穂積陳重の墓が、妻であり、
渋沢の長女である歌子のお墓と並び立っていた。
そして、穂積先生の名前は、その隣の父上のお墓
に次男として刻まれていた。実は、美術館で購入
したバベルにまつわる本の著者も関係者で、それ
に導かれて穂積先生のお墓まで連れてこられたよ
うな気がして不思議だった。そんな縁もあってか、
その後、これもたまたま埼玉県深谷に行く機会
があり、渋沢の生家や、渋沢が作った日本煉瓦製
造（東京駅のレンガを製造）の旧施設（ホフマン
輪窯）を見てきた。

大学（文学部西洋史学専攻）に入った当初は、
イギリス議会史でもやろうと軽く考えていた。と
ころが、担当される穂積先生の演習で扱ったのは、
18世紀後半から19世紀初めまで生きた政論家ウ
ィリアム・コベットの『農村騎行 (Rural Rides)』
[1821-1834]*であり、まだ歴史学のイロハもわか
らないうちに読むのにはかなり高度なものであっ
た。しかし、今から考えると、産業革命の時代に
生きた重農主義者コベットの著作を研究対象にし
た先生には、藍玉農家への買い付けから商売の仕
方を学んだ曾祖父の渋沢栄一のことを念頭にあっ
たのかもしれない。穂積先生には、私の希望した

アイルランド史の通史を使った講読の授業もして
いただいた。だが、そうこうする内に、私の興味
は、イギリス史や議会史というよりはもう少し
華々しい出来事の歴史に興味を惹かれていった。
教育大ではつくばへの移転問題がまだくすぶっ
ていて、学園紛争の余波が残り、紛争を経験した先
輩たちが大学に残っていたことも影響したかもし
れない。そして、何よりも、この大学の先生方や
先輩たちのリベラルで何でも言える雰囲気は心地
よかった。

西洋史学専攻では、異なる言語を扱う演習が3
コマ必修なので第二外国語のほかにもう一つ、ヨ
ーロッパ言語を勉強するように言われ、英語・ド
イツ語に加え、フランス語も勉強した。一番面白
かったのは、ルソー研究者の小池健男助教授が担
当されたフランス語だった。そこで今度はフラン
ス史を志し、フランス人民戦線やパリ・コミュニ
ンの本を読んだり、非常勤の柴田朝子先生のフラ
ンス第二帝政史の授業を受けたりもした。でも、
なぜか今一つしっくりこなかった。そんな時に、
やはり非常勤で来られていた西川正雄先生の授業
に出会ったことが、ドイツ現代史を専攻するよう
になるきっかけだった。

3年生になったばかりであったが、授業では、
いきなりドイツ語の専門書、しかもドイツ社会民
主党に関する古典的なグスタフ・マイヤーの論文
を読むという。最初はほとんどちんぷんかんぷん
だったが、先輩にいろいろ教えてもらったおかげ
で何とかついていくことができた。そして4年生
では、『ドイツ現代史』の著者である村瀬興雄先生
の講義も聞くことができた。卒業論文では、第一
次世界大戦後、バイエルンの首都ミュンヘンで
起こった革命の跡をたどった。先生方と出会い、



ドイツ現代史を専攻すれば、社会主義労働運動のこともナチズムのことも両方できると欲張りなことを考えていた。

卒論に本格的に取り組む前には、出版社や新聞社への就職、あるいは高校教員の道も考え、実際に就職試験を受けたりもしていた。しかし、ある学術出版社で最終面接までいった時、いつになく調子に乗ってしゃべったせいか、「あなたは研究者になりたいのでは？」と聞かれ、かえって覚悟が決まった。卒論研究がようやく面白くなりかけた頃のことである。

大学院は駒場の国際関係論専攻を選び、西川先生の下で研究を始めた。大学院の先輩はみな大学紛争世代でほとんど年齢が5歳以上離れ、既婚者ばかりだった。私が入った当初、西川ゼミには数人しかゼミ生がおらず、先生の質問に答えられないといつまでもシーンとした恐ろしいほど沈黙の時間が続いた。その後、数年してゼミ生が増え、女子学生も入ってくるようになると、ゼミの雰囲気は大きく変わった。しかし、私にとっては、学部時から先生の厳格なご指導に鍛えられ、何でもあらかじめ調べていくようになったことが後々まで役に立った。現在とは違い、何でも図書館の事典や研究書で調べなければわからず、参考文献の所在もすべて図書館の目録をめくって黙々とカード化する作業が必要だった。

修士論文では「第一次世界大戦期のドイツ自由労働組合」を扱った。結論はけっして目新しいものではなかったが、手に入る限り、関係する機関誌・小冊子などの史料と研究書に目を通してことで、史料の面白さと研究への取り組み方を会得したような気分だった。

博士（後期）課程では、フランス革命史研究で名をはせた柴田三千雄先生のゼミにも出席させていただいた。当時大きな話題になっていた社会史や民衆運動史の方法を先生ご自身の口から学ぶことができ、大きな刺激を受けた。西洋史研究が輝いて見えた1970年代後半のことである。大学院時代が、研究者としての足腰を鍛えた時期だったとすれば、1981年からドイツ学術交流会（DAAD）の奨学金を得て西ベルリンで過ごした2年間の留学は、研究者として自立するための貴重な修業時代だった。

まだ西の連邦文書館が遠く離れたライン川とモーゼル川の合流点コーブレンツにあり、東のポツダムにあった国家文書館や、労働運動史関係の文書を集めた東ベルリンのマルクスレーニン主義研究所（社会主義統一党中央委員会付属）に所蔵された文書は簡単には見られなかった時代である。孤島だった西ベルリンへの留学は研究の上では難しい面もあった。だが、壁のある時代にアナーキーなこの街を実生活で体感できたことは、ドイツの戦後史を見る基本的な構えを作ってくれた。

ベルリン自由大学では、社会民主党のヴァイマル共和国初代大統領エーベルトの研究で知られる政治学部のゲオルク・コトフスキ教授の下で学んだ。歴史学部には、ファシズム研究で有名な保守派のエルンスト・ノルテ教授がおり、ヒトラーの政権掌握50周年の記念リレー講義で登壇したところ、学生の非難とヤジで講義できなかったことが印象に残っている。自分のテーマに関しては、留学中に西川先生に誘われて行ったオーストリア・リンツの労働運動史家国際会議での経験が貴重であった。東西の研究者が中立国オーストリアに一堂に会したこの会議では、国際的な労働運動と労働者文化について、関心をそそる最新の議論を聞くことができた。

今から思い返すと、1960年代末から1970年代前半、戦後社会の危機的状況が世界的に現れた騒然とした時期に高校・大学時代を過ごし、大学でさまざまな先生、先輩や友人に出会えたことが、その後の研究者としての進路を決めたように思える。大学を去るにあたって、古い資料やファイルを整理する中でそんなことを考えた。

そうだ、片づけが終わって桜の季節になったら、西ヶ原時代には行けなかった飛鳥山公園を訪ねてみよう。そこには渋沢栄一の邸宅と史料館、渋沢が作った王子製紙の跡地に建つ「紙の博物館」があるから。大学で最初に出会った穂積先生の影響は、思ったよりも近現代史に関わる私の研究関心を方向づけていたのかもしれないから。

（2018年3月14日記）

* 参照：穂積重行「ウィリアム・コベットの「ラディカリズム」」『史潮』新1号、1976年、pp.105-118.

研 究 業 績

相馬 保夫

I. 著書

1. 『ドイツの労働者住宅』 山川出版社, 2006 年, 90pp.

II. 編纂書（共編著）

1. 「序論 ヨーロッパの労働者文化と労働運動—歴史研究への新たな挑戦」 小沢弘明・佐伯哲朗・土屋好古編『労働者文化と労働運動—ヨーロッパの歴史的経験』 木鐸社, 1995 年, pp.7-16.
2. 「ヴァイマル期ベルリンにおける都市計画・住宅建設と労働者文化」 小沢弘明・佐伯哲朗・土屋好古編『労働者文化と労働運動—ヨーロッパの歴史的経験』 木鐸社, 1995 年, pp.59-149.
3. 「『賃貸兵舎』から『新しい住まい』へ—都市計画・住宅建設のパラダイム転換：1920 年代ベルリン」 田中邦夫編『パラダイム論の諸相』 鹿児島大学法文学部, 1995 年, pp.179-215.
4. 「ヨーロッパの労働者世界とその運動」 歴史学研究会編『講座世界史』第 3 巻, 東京大学出版会, 1995 年, pp.145-172.
5. "Neuere Forschungen zur Geschichte der japanischen Arbeiter- und sozialistischen Bewegung," Christine Schindler (Hrsg.), *Die Internationale der "Labour Historians". Stand und Perspektiven der Arbeiter/innen/geschichtsschreibung im 30. Jahr der ITH*, Wien, 1995, pp.45-60.
6. 「アメリカニズムとヴァイマル期労働者文化—フォーディズムと社会主義」 増谷英樹・伊藤定良編『越境する文化と国民統合』 東京大学出版会, 1998 年, pp.57-78.
7. 「民族自決とマイノリティー戦間期中欧民族問題の原点」 田村栄子・星乃治彦編『ヴァイマル共和国の光芒—ナチズムと近代の相克』 昭和堂, 2007 年, pp.76-116.
8. 「ヴァイマルの残照—反ナチ抵抗運動の戦後ドイツ・ヨーロッパ構想」 田村栄子・星乃治彦編『ヴァイマル共和国の光芒—ナチズムと近代の相克』 昭和堂, 2007 年, pp.314-347.
9. 「シティズンシップとマイノリティー戦間期ドイツ・中欧問題の枠組み」 立石博高・篠原琢編『国民国家と市民：包摂と排除の諸相』 山川出版社, 2009 年, pp.166-188.
10. 「記念碑に見るホロコーストの歴史と記憶—ポーランドとドイツの強制収容所跡記念碑・記念施設を中心に」 吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編『画像史料論』 東京外国語大学出版会, 2014 年, pp.158-175.
11. 「二つの世界大戦」 木村靖二・千葉敏之・西山暁義編『ドイツ史研究入門』 山川出版社, 2014 年, pp.151-176.
12. 「ドイツにおける「外国人労働者」問題と多言語・多文化社会化」 長谷部美佳・受田宏之・青山亨編『多文化社会読本—多様な世界, 多様な日本』 東京外国語大学出版会, 2016 年, pp.20-30.

III. 論文

1. 「第一次世界大戦期のドイツ自由労働組合」 東京大学大学院社会学研究科修士論文・未刊行.
2. 「第一次世界大戦期のドイツ自由労働組合」『歴史学研究』487 号, 1980 年 12 月, pp.1-17.
3. 「『労働協同体体制』の成立—ドイツ革命からインフレーションへ」『史学雑誌』第 96 編 11 号, 1987 年 11 月, pp.1-42.

202 研究業績

4. 「ドイツ革命期における経営協議会と労働組合—ベルリン金属工の場合」『大原社会問題研究所雑誌』 353 号, 1988 年 4 月, pp.1-21.
5. 「ヴァイマル共和国の労働者文化—研究の現状」『大原社会問題研究所雑誌』 391 号, 1991 年 6 月, pp.1-19.
6. 「ルール鉱夫と作業方時間問題—1919-1920 年」1, 鹿児島大学法文学部『人文学科論集』 36 号, 1992 年 10 月, pp.123-149.
7. 「ルール鉱夫と作業方時間問題—1919-1920 年」2, 鹿児島大学法文学部『人文学科論集』 37 号, 1993 年 2 月, pp.55-89.
8. 「視覚的表象と労働者文化—ドイツ: 1890-1933 年」『歴史学研究』増刊号, 729 号, 1999 年 10 月, pp.161-168.
9. 「離散と抵抗: ヴェンツェル・ヤークシュ覚書 (1)」『東京外国語大学論集』第 69 号, 2004 年 12 月, pp.117-135.
10. 「離散と抵抗: ヴェンツェル・ヤークシュ覚書 (2)」『東京外国語大学論集』第 71 号, 2005 年 12 月, pp.107-126.
11. 「離散と抵抗: ヴェンツェル・ヤークシュ覚書 (3)」『東京外国語大学論集』第 75 号, 2007 年 12 月, pp.153-170.
12. 「戦間期ドイツ・中欧におけるマイノリティ問題の射程—研究の現状」『東京外国語大学論集』第 76 号, 2008 年 6 月, pp.227-239.
13. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (4)」『東京外国語大学論集』第 77 号, 2008 年 12 月, pp.153-172.
14. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (5)」『東京外国語大学論集』第 78 号, 2009 年 7 月, pp.151-170.
15. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (6)」『東京外国語大学論集』第 79 号, 2009 年 12 月, pp.159-176.
16. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (7)」『東京外国語大学論集』第 80 号, 2010 年 7 月, pp.105-122.
17. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (8)」『東京外国語大学論集』第 81 号, 2010 年 12 月, pp.243-260.
18. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (9)」『東京外国語大学論集』第 83 号, 2011 年 12 月, pp.143-161.
19. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (10)」『東京外国語大学論集』第 84 号, 2012 年 7 月, pp.199-217.
20. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (11)」『東京外国語大学論集』第 85 号, 2012 年 12 月, pp.277-294.
21. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (12)」『東京外国語大学論集』第 86 号, 2013 年 7 月, pp.87-106.
22. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (13)」『東京外国語大学論集』第 87 号, 2013 年 12 月, pp.101-120.
23. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (14)」『東京外国語大学論集』第 88 号, 2014 年 7 月, pp.237-256.
24. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (15)」『東京外国語大学論集』第 89 号, 2014 年 12 月, pp.195-215.
25. 「離散と抵抗: ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (16)」『東京外国語大学論集』第 90 号, 2015 年 7 月, pp.57-77.

26. 「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (17)」『東京外国語大学論集』第 93 号, 2016 年 12 月, pp.111-129.

IV. 学界動向、書評、エッセイほか

1. 「西ドイツにおける最近の労働運動史研究—K.テンフェルデ『19 世紀ルール鉱山労働者の社会史』によせて」『史潮』新 6 号, 1979 年 11 月, pp.112-121.
2. 「第 18 回リンツ会議に参加して」『歴史学研究』516 号, 1983 年 5 月, pp.34-38.
3. 「書評 篠塚敏生『ドイツ革命の研究』」『史学雑誌』第 94 編 3 号, 1985 年 3 月, pp. 88-94.
4. 「書評 ズザンヌ・ミラー『戦後ドイツ社会民主党史』, トマス・マイヤー『ドイツ社会民主主義入門』」『大原社会問題研究所雑誌』356 号, 1988 年 7 月, pp.71-73.
5. 「ドイツ革命論の新展開—木村靖二『兵士の革命：1918 年ドイツ』によせて」『現代史研究』34 号, 1988 年 12 月, pp.75-87.
6. 「書評 石垣信浩『ドイツ鉱業政策史の研究—ルール炭鉱業における国家とブルジョワジー』」『歴史学研究』595 号, 1989 年 7 月, pp.59-62.
7. 「1989 年の歴史学界 回顧と展望 現代ドイツ」『史学雑誌』第 99 編 5 号, 1990 年 5 月, pp.377-385.
8. 『ヴァイマル期ドイツにおける産業合理化と労働者文化』平成 4 年度科学研究費補助金（一般研究 C）研究成果報告書, 1993 年 3 月.
9. 「ベルリンからリンツへ—最近のヨーロッパ労働運動史研究事情」『大原社会問題研究所雑誌』423 号, 1994 年 2 月, pp.46-51.
10. 「ドイツの二つの『過去の克服』をめぐって—ザクセンハウゼン強制収容所跡記念施設の新構想」『西洋史学論集』32 号, 1994 年 12 月, pp.49-58.
11. 「『シンドラのリスト』の謎—映画から歴史学へ」『鹿大史学』42 号, 1995 年 1 月, pp.7-21.
12. 「書評 クリストフ・クレスマン『戦後ドイツ史 1945-1955—二重の建国』」『ドイツ研究』21 号, 1995 年 12 月, pp.121-125.
13. 「書評 山本佐門『ドイツ社会民主党日常活動史』」『歴史学研究』685 号, 1996 年 6 月, pp.74-76.
14. 「書評 山本秀行『ナチズムの記憶—日常生活からみた第三帝国』」『史学雑誌』第 105 編 7 号, 1996 年 7 月, pp.113-120.
15. 「書評 太田和宏『家父長制の歴史構造—近代ドイツの労務管理と社会政策』」『大原社会問題研究所雑誌』458 号, 1997 年 1 月, pp.56-61.
16. 『ナチスの労働者統合政策—労働組合から労働戦線へ』平成 8~9 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書, 1998 年 3 月.
17. 「フーコー—権力と自由」田中邦夫編『テキストによる人文科学入門』鹿児島大学法文学部, 1998 年, pp.123-134; 田中邦夫・高津孝編著『知のポリフォニー—テキストによる人文科学入門』松柏社, 2003 年, pp.201-214.
18. 「1998 年の歴史学界 回顧と展望 現代ドイツ」『史学雑誌』第 108 編 5 号, 1999 年 5 月, pp.381-388.
19. 「リンツ会議の報告を読んで」『リンツ会議ニュース』第 15 号, 2000 年 5 月, pp.13-19.
20. 「書評 中野隆生『プラーグ街の住民たち—フランス近代の住宅・民衆・国家』」『歴史学研究』740 号, 2000 年 9 月, pp. 46-49.
21. 「ドイツ労働史・労働運動史研究」『大原社会問題研究所雑誌』512 号, 2001 年 7 月, pp. 1-12.

204 研究業績

22. 「ホロコーストの歴史と記憶—ドイツにおける研究と展示」『史潮』新 53 号, 2003 年 5 月, pp. 52-64.
23. 「第一次世界大戦後の中欧における民族自決とマイノリティー—マイノリティ保護条約とチェコスロヴァキア・ドイツ系住民の問題—」平成 14~16 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書, 2005 年 4 月,『戦間期ヨーロッパにおける危機の社会的・文化的位相: ヴァイマル・モデルネと現代』(研究代表者: 星乃治彦), pp.59-85.
24. 「2006 年の歴史学界 回顧と展望 現代一般」『史学雑誌』第 116 編 5 号, 2007 年 5 月, pp.362-365.
25. 「2007 年度歴史学研究会大会報告批判: 現代史部会」『歴史学研究』835 号, 2007 年 12 月, pp.47-49.
26. 「戦間期ドイツ・中欧におけるマイノリティ問題の射程—研究の現状」『東京外国語大学論集』第 76 号, 2008 年 7 月, pp.227-239.
27. 「西川正雄先生と社会主義・労働運動史研究」『ゲシヒテ』第 2 号, 2009 年 3 月, pp.102-109.
28. 「歴史展示のポリティックス—ドイツ歴史博物館をめぐる論争」『歴史学研究』854 号, 2009 年 6 月, pp.28-35, 44.
29. 「街路をめぐる闘い—メーデー行進から「民族共同体」へ」国立歴史民俗博物館『歴博』No. 181, 2013 年 11 月 20 日, pp.16-19.
30. 「書評 北村厚『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想』」『史学雑誌』第 124 編 8 号, 2015 年 8 月, pp.1490-1496.

V. 翻訳

1. ディーター・フリッケ「労働者階級の日常史—方法論の諸問題」『歴史評論』381 号, 1982 年 1 月, pp.11-26.
2. ヴォルフガング・ベンツ「現代ディアスポラとしてのユダヤ難民」『クアドランテ』4 号, 2002 年 3 月, pp.159-165.
3. R.S. ヴィストリヒ『ヒトラーとホロコースト』相馬保夫監修, 大山晶訳, ランダムハウス講談社, 2006 年.

VI. 辞典類

1. 法政大学大原社会問題研究所編『社会・労働運動大年表』全 4 巻, 労働旬報社, 1986-87 年, 編集;『社会・労働運動大年表』新版, 全 2 巻, 労働旬報社, 1995 年, 編集.
2. 南塚信吾責任編集『歴史学事典』4: 民衆と変革, 弘文堂, 1996 年.
担当項目: 「赤旗」、「団体交渉」、「熟練労働者」、「労働歌」、「労働貴族」、「労働者互助扶助組織」、「産業別労働組合」、「職能別労働組合」、「労働組合」、「国際労働組合連合」、「ストライキ」、「ゼネスト」、「メーデー」.
3. 西川正雄他編『角川 世界史辞典』角川書店, 2001 年.
担当項目: 「ヴァイトリング」、「エーベルト」、「エルフルト綱領」、「エンゲルス」、「オイゲン」、「カウツキー」、「共産党宣言」、「キリスト教社会主義」、「空想から科学へ」、「空想的社会主義」、「クデンホーヴェ・カレルギ」、「講壇社会主義者」、「ゴータ綱領」、「資本論」、「シャイデマン」、「社会主義者鎮圧法」、「社会民主主義労働者党」、「社会政策学会」、「シュヴァイツァー (ヨハーン)」、「自由労働組合」、「シュモラー」、「スパルタクス団」、「全ドイツ労働者協会」、「ドイツ社会主義労働者党」、「ドイツ独立社会民主党」、「ノイエ・ツァイト」、「ノスケ」、「ハイネ」、「ヒルシュ・ドゥンカー労働組合」、「ヒルファーディング」、「フォーアヴェルツ」、「バーベル」、「ベルンシュタイン」、「マルクス」、「メーリング」、「ラサール」、「リープクネヒト (ヴィルヘルム)」、「リープクネヒト (カール)」、「ルクセンブルク」、「ローテ・ファーネ」.